
世界を奏でし奏者

竹千代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を奏でし奏者

【Nコード】

N5734X

【作者名】

竹千代

【あらすじ】

古の力。今のなをダスト。

それは現代をも凌駕する高度な科学力のことである。そしてその起動スイッチは音楽を奏でること。

ある日、皆藤奏太は大おじいさんと呼ばれる。

そこで、出会ったのはダストを元に造られた五体の少女姿のロボット。

大おじさんが奏太を呼んだ理由は、奏太を蒼の音源の奏者にするた

めだった。

そして、そこで敵に攻撃された奏太達は、蒼の音源を起動させ、

これは、音楽を奏で敵と戦う蒼の奏者と五体のロボットの物語。

古の力とは……？ - the old force is it……？ -

古の力。

それは、その当時の技術ではあり得ない現代をも凌駕する高度な科学力。

その力を多くの科学者又は国が探し、求めた。

そして世界各地で、高度科学の記述文章 - Description of advanced science texts - (DOAST - ダスト -) が見つかった。

……………

”本日未明にさきたま古墳群でダスト が見つかりました。尚、全世界の科学者と首相や総理が日本に情報の開示を求めています。…

……………”

3

テレビでは最近こんなニュースしか報道しなくなっていた。

だけど、それも当然だろう。

「なんか面白味のないニュースだなあ。ねえ母さん。面白いことない？」

と、テレビから目を離さずに問い掛けるのは皆藤奏太。

「私に面白いこと聞いたって何もないでしょ。あー、ほら明日から大お爺ちゃんのどこに行くんだからちゃんと準備しなさい。私たちはついていけないんだから自分でやるの！ほら！早く！」

母親に急かされ渋々といった感じで準備をする奏太。

そう、今季節は夏で絶賛夏休み中だった奏太は突然大お爺ちゃん - 皆藤源太郎 - に名指しで来るようにと言われていた。

「母さん。保険証はどこ？」

そんなことを言いながら奏太は、皆藤源太郎からの手紙に同封され

ていた鍵がたのネックレスを眺めつつ首にかけ、疑問を口に出した。
「何でこの時期にネックレス送ってきて、爺ちゃんちこいつて言うんだ？」

その時、鍵に埋め込まれている青い宝石が発光していたが、奏太はきづいていなかった。

そして一日が過ぎ、翌日の早朝に奏太は家を出、皆藤源太郎の住む山奥の町民15人の集落とも言える村へと向かった。

電車で九時間、徒歩での山登りで三時間計十二時間の移動である。

電車での移動は別に大したことではないのだが、そのあとの山登りが辛い。

なんといったて、その山には人の出入りが一切なく完全に世間から遮断されている。

さらに言えば、村へと続く一本道の両脇には延々と墓が連なっており一人であるくのも心細い。

そんな思いまでして、行きたくないなと奏太が考えているうちに電車が目的地へとつき、慌てておりた。

駅は無人駅になっており、人一人いないぶつちやけ言えば今まで乗っていた電車にも乗客などいなかった。

奏太は眼前の風景を目を細め怪訝な表情をとる。

そう、奏太の眼前にある風景はどこまでも続く田園地帯その奥には五つに連なった山、そして右前方にこれから上る古山があるだけだ。奏太は現実から目をそらすように下を向くと深いため息を一つ落とした。

暫く、その状態でホールドしていたが意を決したように古山へと歩き出した。

「やっぱ、ここ入りづらい……。何でここに墓地なんか作っただよ。ここを三時間か身体的にも精神的にも来るな……。ハア……。……。」

古山の前で佇んでいる奏太は見るからに当たり前のことを口として漏らす。

ふと、遠くの方で誰かが奏太の事を見つめている気がした。

その方向を見るが誰もいない。不思議に思いつつも気のせいだと決め先を急いだ。

とぼとぼと山を登る。途中休憩してもいいのだが、両脇には墓があるためあまり留まっていたくない。そのため、一気に登ることを良しとした。

中腹の辺りまで来たところで、もう少しでつく村の方から若い女の人達が歌を歌っている声が聞こえてくる。

最後、階段に差し掛かったとき歌声は止み突如、緑髪の少女と銀髪の少女が階段から飛び降りて来、その他赤髪の少女、金髪の少女、黒髪の少女がそれぞれ奏太を包囲する形で後ろの方から歩み寄ってきた。

そして、緑髪の少女が口を開いた。

「初期試作機”朱雀”が問います。貴方はどちら様ですか？もしや、現皆藤家当主様の知り合いのかたで？本日に当主様のお孫様が来るとの情報で。あ、貴方は奏太様ですか？」

「えっと、僕は皆藤奏太。源太郎さんの孫だけど……………君は？」
関係者であることを告げ、名前を聞く。

「当主さまのお孫、奏太様。初期試作機”朱雀”と言ったではありませんか。朱雀とお呼びください。」

「じゃ、じゃあ朱雀ここを通してくれないかな？」

「嫌です。当主様がここで待っていると仰っていましたので。」

「はあ……………どうすればいいの？」

途方にくれ、困っていると。

階段の上の方に人影が見えた。逆光でよく見えず目を細めてよく見るとそれは源太郎だった。

源太郎は、こちらが自分を確認したことを見ると顎を動かし此方に来いと促した。

「どうぞ。」

朱雀と隣にいた銀髪の少女が道を開けたので、奏太は階段を登り源

太郎の後を着いていった。

源太郎の家につくと宛がわれた部屋に荷物をおき、休む暇もなく源太郎が待つ大広間へと急ぐ。

ガラガラと襖を開けて部屋へと入り、用意されていた源太郎の前の座布団へと座り源太郎の言葉を待った。

無言のまま時が過ぎる。

十秒経ったのだろうか？ いや、十分か？ 等と考えていると源太郎が喋り出した。

「奏太。お前は手紙に同封されていた鍵は持ってきたのか？」

「う、うん。」

「なら良い。そして本題にはいるがお前、近頃見つかったいる高度科学の記述文章・ダスト・はしっているな。これは、武器の製造法や新エネルギーの製造法など様々なことの知識を与える。だが、それらの本質を真に理解できるものは少ない。その為にこれ等の技術を悪用するやつらが現れる。」

すると源太郎はそこで言葉を切り、おもむろに立ち上がると部屋の襖を開け、朱雀たち五人を部屋へと入れれた。

のそのそと朱雀たちが入ってくる。

「初期試作機”朱雀”です」

第一声がこれだった。さつきも聞きました、などと思っていると、先程は名を言わなかった銀髪の少女が名前を言った。

「第二試作機”白虎”です」

すると、この二名を皮切りに後の三人が自らの名を名乗る。

「戦闘用実用機”玄武”だ」

これは、赤髪の少女。

「第二戦闘用実用機”青龍”です」

これは、黒髪の少女。

「守護型特殊装甲機”雅”」

そして最後に、金髪の少女。

自己紹介の時、奏太は源太郎が不気味な笑みを見せたことに気づい

た。

笑みはすぐに消えたが、奏太の中には不安感が消えずにいた。

そして、源太郎が奏太に何かを告げようとした瞬間、爆発音と共に視界が真っ白になった。

古の力とは……？ - the old force is it……？ - (後書

どうも、竹千代です。

この作品は、今連載中のもう一つ作品”人類の勇者さま”と平行作業になると思うのであまり直ぐには更新できないと思われます。

では、最後にここまで読んで下さった皆様に大きな感謝の意を記して。

また、次回も出会えたら会いましょう。

覚醒と出会い

凄まじい音と光が視覚と聴覚を奪う。

すべての音はかき消され、僅かな耳鳴りと静寂だけが世界を仕切る。

十数秒後、不意に静寂が途切れ声が聞こえるようになった。

不意に聞こえてきたのは、美しく透き通った声で歌う少女の歌声。

奏太は、歌声のする方を見る。

そこで歌っているのは金髪の少女”雅”だった。

雅はなぜこの状況で歌っているのか？そんなことを考えると、あることに気がついた。

こちら辺一体だけ景色が白かった。

不思議におもっていると不意に朱雀が奏太に喋りかけてきた。

「奏太様。奏太様は知らないのですね。では、説明いたします。とりあえず、私達のこと説明しますが、私達は判断しにくいでしょうが機械です。そして、ダストにかいてあった科学技術をもとに造られた物であります。まあ、多少改造はありまして、私達には人工知能がついており、最善の判断と人道的判断が出来るようになっていきます。そして、最大の利点ですが、それは私達ダストをもとに製作された機械は其々に強化な力があります。そしてその力を行使するためのキーが音楽です。歌、これは私達の力を引き出すための儀式に近いもので、それが発達して今の歌や音楽があります。雅が歌っているのはその為です。そして、奏太様がここに呼ばれた理由は、朱雀はそこで言葉を切り、後ろにいる源太郎に目を向けると今度は源太郎が喋り出した。

「うむ。儂がお前を呼んだ理由は、お前を奏者にするためだ。とにかく、お前の足下の畳を剥がせ。だが、雅を中心に半径4 m以外には出るなよ。雅の力は絶対防御と半径4 m以内のステルスだ。」

不思議に思いながらも朱雀と共に畳を剥がす。

そこにあつたものは黒い大きな箱だった。

箱には鍵穴があり、これがどうしたのかと源太郎をみるとジェスチャーでネックレスのことを指摘した。

そこで、鍵がたのネックレスを見ると鍵についている青い宝石が強く輝いていた。

「選ばれた、か。」

源太郎がポツリと呟く。

「ですね。」

源太郎の呟きのあと直ぐに眼鏡を掛けた黒髪の少女“青龍”がその言葉を肯定するように告げた。

「な、なあじいちゃん。どういふことなんだよ。何で、これ光ってるんだよ。」

そして、奏太が鍵に手を触れた。

その瞬間、目の前に - 蒼の音源起動 - とかかれたウィンドウが表示された。

“ 蒼の音源起動を確認。 蒼は周りにあるリンク無しの機体をスキヤン。 1%…2%…:…: 10%…:…: 30%…: 50%…: 70%…:…: 99%、100%。 スキャン完了。 リンク無しの機体を四体確認。 リンクを張りますか? ”

鍵が音声で奏太に告げる。

すると奏太は、初めての事の筈なのに全てを知っているかのようにことを進めていく。

「リンクの結合を開始。 蒼の音源をダスト起動キーとして登録。 音源の調律。」

“ 了解。 では、鍵を鍵穴に翳してください。 ”

そして、奏太が鍵を鍵穴に翳す。

すると大きな箱が蒼い光を放ち宙にへと浮上し蓋が開き中からバイオリンが顔を出した。

「蒼の音源を確認。 調律を開始。」

奏太は、バイオリンを取ると徐に弾く。

この時、奏太は奏者にそして五体の少女達の所有者になった。

「調律の終了。」

”リンクの結合の終了。並びに、蒼の音源をダスト起動キーとして登録完了しました。”

「了解。」

そこで全ての初期設定が終わった。

すると奏太は頭を押さえて佇みそして、この場の全員に言いはなった。

「なんか、頭が凄く痛い。俺、何してたんだ？でも、やるべきことだけは頭にあるんだ。朱雀、玄武、白虎、青龍、雅。力を貸してくれ。」

「はい、奏者様」

「じいちゃん、こいつら借りてくけどいいか？」

五人の返事を聞き源太郎は僅かに頷いた。

「もう、そいつらはお前のもんじゃ。存分に使え。」

その、言葉を聞き奏太は動いた。

「蒼の音源をダストにコネクト。」

バイオリンを構え蒼の音源の返答を待つ。

”ダストとのコネクトに成功しました。さあ、奏でましょう。”

奏太は徐にバイオリンを構えた。

その直後、展開されていた雅の力が消えた。

敵の姿を探す。

すると、斜め右の一時の方向に健全な男性の人間の身長の三倍ほどの大きなロボットがいた。

それは、こちらの姿を確認すると禍々しい起動音と碧の粒子辺りに撒き散らしながらこちらへと襲い掛かってきた。

直後、爆発が起きた。

その頃、古山の麓の入り口には少女と三十代半ばの女性がいた。

「ねえねえ、エリーゼ。婚期逃しちゃった。どうしようか？」

「私にはどうすることもできませんね。まあ、そんなことよりも今、奏者が誕生しました。マリーナ、貴女と同じ”色”の音源奏者ですわよ。どうするのですか？あいつ。」

そこで、山の頂上から爆発音と共に黒煙が上がる。

「あらあら。もうあいつは、私以外の誰かがやってるみたいね。

じゃあ、挨拶はまた今度にしましょう。取り合えず、今は総督様にこの事を伝えておきましょう。」

「了解。」

「そつだ、色は何色なの？」

「蒼です。」

「ふうん。蒼ね……私の緋とは交わらない色だわ。」

「否定はしませんが、肯定もしません。だって色は混ざるものなのですから。」

そう言つて、エリーゼと呼ばれた少女は腰から携帯を取り出すと電話を掛けた。

「総督様。蒼の音源の奏者を発見しました。先客がいるようなので私達は一度帰還します。」

”分かった。気を付けて帰ってこい。お前らを狙っているやからもあるんだからな。”

電話先の相手が野太い声でそう告げると、マリーナと呼ばれた女性が電話を引ったくった。

「私達の心配をしてくださるなんて、ありがたき幸せですわ！」
「そんなんだから婚期逃がすのですわ。」

声を張り上げるマリーナにすかさず小言を言うエリーゼ。

暫くすると、無言だった電話からやつと返答が返ってきた。

”あ、ああ。そんなことよりも蒼、か。どんな力を持ってるんだろ
うな？ククク……楽しみだよ。”

エリーゼがマリーナから携帯を取り返し通話を切る。

そして、そこにタイミング良く奏太達を襲っていた筈の白いロボットが降ってきた。

それは、落ちてきたと言うのにもどこも壊れることなく二人の方を向いた。

「これはっ！早く繋いで下さい！」

「くっ！全くもって面倒臭い連中が挨拶してることっ！緋の音源起動！コネクト！」

二人とも驚きはしていたものの直ぐに戦闘体制に入った。

そして、その二人の周りを炎が覆う。

「準備はいいかしら？」

「何時でも。」

ギターの音が響き渡る。

覚醒と出会い（後書き）

にやっほ！

割りとお早くお会いできました竹千代です。

更新早いけどたぶん今回だけだから。

あまり期待しないでね。

次の更新はもうひとつの方かな？

では、またで会えることを祈って（＾o＾）／

ファーストアプローチ

緋の音源を起動させたマリーナは、ロボットと相対していた。炎が辺りを覆い、もう誰も逃げることは出来ない。

「逃げられないわよ。」

「そうですね。フツ、ですがあなたですよ。」

頭部のスピーカーから操縦士の声が響く。

ロボットは中世の騎士の格好であり、名をDBK-001（DOAST BREAKER KNIGHT）。教会の持つ上位機体の上級ランク戦闘用機体である。

「で、教会の騎士様がなんのご用で？やっぱり上の？」

「そうなります。ですが、目標が1人増えました。おっと、もう一機ですかね？」

そう言つてエリーゼを一瞥。

「私の相棒に何か文句でも有るのかしら？」

「いえいえ。ありませんよ。まあ、兎に角早く始めましょう。戻らなくてはいいけませんので。」

騎士が動きだし、マリーナとエリーゼとの距離を詰める。

ガシャンガシャンと金属音が響く。

緋の中に碧が踊る。

マリーナは、緋の音源であるギターを構える。

「いくわよっ！」

「了解」

刹那、ギターを弾くマリーナ。

弾くのはヘビメタ。

緋に相応しい力のある音。

そして、そのおとに誇張するようにエリーゼの胸の辺りが光だす。それはしだいに強くなり、弾けた。

「ダストの解放。 - I was born to do? - 」

「否、答えは。」

その言葉と共に光が収束しその光がエリーゼを包み込む。

「我魂の中にあり。」

エリーゼを包んでいた光が散布しフードを目深く被った黒いローブとズボンそして大斧を持った姿のエリーゼが出てきた。

” そうですか。その姿が………死神と呼ばれるダストがあると聞いていましたが成る程、満更間違っていないようだ。その斧がいい味出してますね。”

騎士はそう言いながらも間合いを詰める。

エリーゼは口許しか見えない顔を騎士へと向け、口を歪ませた。直後、エリーゼの周りに多数のウィンドウが立ち上がった。

そしてエリーゼはその一つに素早く何かを打ち込み大斧を大地へと振りかざした。

身の危険を感じ立ち止まった騎士はエリーゼを見詰めるが2秒後3秒後なにも起こらない。

何もないのだと思い騎士が走り出した瞬間、ゆっくりとエリーゼを中心に地面が割れた。

” 地割れ、ですか。全く、これくらいでどうかなるとでも？ なめないでください！”

エリーゼはゆっくりと大斧を地面から抜き騎士を見据えた。

「じ・えんどですね。」

地割れのスピードは速くなり、瞬く間に拡がった。

騎士のあしもとが崩れる。

足の踏み場を無くした騎士は、奈落の底へと落ちて行きそうになるが土の壁に腕を突き刺し落下を止める。

そしてそこから壁を這い上がり登ってきた。

” まだまだ終わりませんよ。”

騎士は走る。

「私の死神と呼ばれる由縁を教えてあげましょう。相対するものをすべて殺し、その首を狩るからです。」

エリーゼはそう言つて笑うと騎士へと跳ねた。

「首、貰いますよ。」

目指すは騎士の首と大斧を大きく後ろへ振り――

” 甘いですよっ！ ”

騎士はエリーゼの足を狙い銃を撃った。

銃弾はエリーゼの右足に当り、エリーゼの足を破壊した。

「ああっ！」

バランスを崩したエリーゼはそのまま重力に任せ落ちて行く。

「エリーゼ！」

マリーナがギターを弾くのを止め叫び、炎が消え去り田園地帯が顔を出す。

” おっと。ギター、弾くのを止めていいんですか？ ”

騎士は目標を変え、マリーナに向け銃口を向けた。

マリーナはそこで地面に経たりこむ。

「マリーナっ！」

” さよならです。私が相手で残念でしたね。ちなみに、自己紹介が遅れましたけど私、教会日本支部所属、騎士団第三位ロガノフ・ツベリオンです。 ”

引き金を弾く瞬間、横からの突然の衝撃波により銃が宙を舞い、騎士が何かに地面に押さえ付けられた。

「全く。斧の使い方がなってます。いつもどのように勝ってたんですか？」

朱雀がエリーゼを抱き抱えながら地面へと着地。

その他の六人も地面へと順々に着地した。

源太郎がエリーゼを一瞥した。

その傍ら奏太がバイオリンを構え立っていた。

「ど、どうやってこんなに早く山を降りてきたのよ?!」

マリーナの間に朱雀達が一斉に答える。

「『落ちてきました。』」

え?とマリーナは思う。

落ちてきた、それはさっきの攻撃を見れば良くわかる。

だが、山の頂上にいた人たちがどうやって落ちてくるだろうか。

「わっわっ！そんなこと考えてる場合じゃないのよ。貴方達ここになにするって言うの？」

朱雀は何をいつてるんだこの人とも言いたげに半目で答える。

「戦うのですけど。状況わかってます？」

言われ、当りを見渡す。

今騎士と戦ってるんだったと気付きマリーナは赤面し俯いた。

「まあ、何でもいいですけど。兎に角、早くスカート直してください。奏太様の目に悪いです。あれですか？それは、パンツじゃないから恥ずかしいもんっ！的なものですか？」

朱雀の改心の一撃でマリーナはついに泣いた。

「うええええ……何よ！今までかつこ良く決めようと思ってたのにい……………ううう。」

朱雀はなにも言わずマリーナの肩を二度ポンポンと叩くと奏太のものとへと向かった。

「奏太様。お怪我は？」

「無いよ。大丈夫、いけるよ。」

わあぎゃあとマリーナが吠えているが無視。

「では、奏者様始めてください。」

「了解」

奏太はバイオリンを弾いた。

それと同時に雅を除く朱雀達が光に包まれた。

「「汝、その魂は誰のために捧ぐ。」」

「力なきもののために」

言葉は虚空に消え一対の剣を生み出した。

其を朱雀が手に取り降り下げる。

金属音が空気を震わせすべての光が揺らぎ、消えた。

「いざ、尋常にー」

朱雀達は着物姿であったが、しかし、其々に武器を持ち佇んでいた。

朱雀が刀、白虎が槍、玄武がハンマー、青龍はアーマーを展開していた。

そして、朱雀の掛け声とともに跳んだ。

「参ります。」

騎士は咆哮を上げ、騎士を地面へと押さえつけていた何か糸のようなものを引きちぎり立ち上がった。

「よくも私を地面なんかに……………。殺してやるよ。ツハハハ！全部ぶっ壊してやるよ。」

騎士は己の右手その剣を振り朱雀達を風ぐ。

吹き飛ばされた四人は体制を整える暇なくまた後方に吹き飛ぶ。

「やるな」

いったのは玄武。

玄武は他の三人の誰よりも早く体制をたてなをし騎士へと走りよった。

僅か1秒ほどで距離を積めた二機は互いの武器を叩きつけあった。

「ハハッ！そんな攻撃で倒せるとでも思っているのか？」

騎士は剣を風ぐ。

凄まじい風が起こり、玄武はハンマーを地面へと差し身を屈めた。

「コード、鎌鼬！」

騎士が叫ぶと同時に更に風がふく。

そして、玄武の服に横にまっすぐな切れ目できた。

「ちっ！意外とお気に入りでっただんどぞ。」

玄武は、切れた服に目もくれず騎士へと向かう。

「何度来ようと同じだあ。コード、鎌鼬！」

剣が振られ見えない刃が迫る。

「っ！！」

玄武が後方に吹き飛ぶ。

「まだまだ！」

風ぐ。

「何度も通用するかっ！」

玄武はそれを避けるため大きく跳んだ。

だが、と玄武は思う。

自分は近距離戦用、あいつは遠距離戦用。
近づけなければ意味がない。

玄武がふと、回りを見渡すと朱雀達が走っていた。

すると、ウィンドウが開きこれから行う作戦についての概要と発案者が表示された。

玄武は思う、こんなのできるはずがない。無理だ。だが、朱雀のこ
とだ勝算があると見越したのだろう。ならば、従おう。一か八かだ
つ。

「うおおおお。」

玄武は大地を蹴った。

” はは、まだ来るか。何度来ても無駄だろうに。”

騎士は風ぐ、風ぐ、風ぐ。

「ぐう……………」

攻撃は玄武へと直撃。

” ハハハ！これでお仕舞いか？”

玄武は空を舞っていた。

「損傷大、強制機能停止迄の時間10分。玄武はこれより玄帝モードへと移行。」

玄武は白く発光しながら地面へと落ちた。

「わ、私の目的は時間かせ、稼ぎ。で、でもじゅ、準備はできた。」

玄武は首から上を上げ、騎士の後ろを見る。

” ああ？何が時間稼ぎだ。他のやつらは……………っ！！な、なに！！”

騎士が見たのは自らの後ろにいた朱雀たち。

「終わりですね。」

青龍が言う。

” 終わらないさ。まだ。”

騎士は地を抉り強引にターンし走る。

「まだ、です。もう少し。」

朱雀が攻撃のタイミングをはかる。

”攻撃は無しか！怖じ気づいたのか？”

距離が近くになったところで叫ぶ。

「青龍っ！！玄武っ！！」

「了解。」

僅か数秒後、地面から水が吹き出し青龍のもとへと収束する。

「行きます。コード、青帝。」

水の塊が騎士を呑み込む。

「玄武、宜しく願います。」

玄武はゆっくりと立ち上がり水の塊へと歩む。

「コード、玄帝！」

ハンマーを水へとつける。

一瞬だった。

突如水は氷となり騎士を覆った。

「コード、炎帝。」

「コード、白帝。」

朱雀の刀は炎に白虎の槍は風をまとう。

「亡びなさい。」

刀が氷をきり、槍が氷を突き抜ける。

”くそっ！次はぶっ壊す！”

騎士は吐き捨て、直後爆発した。

「奏太様もういいですよ。終わりました。」

「あ、うん。あ……………」

奏太は倒れた。

「奏太様っ！奏太様っ！」

朱雀が駆け寄り、奏太に声を掛ける。

「ところで、あの二人組は何処に行ったのじゃろっなあ……………」

源太郎が空を見上げるとヘリが見えた。

”源太郎さん！大丈夫ですかー？助けに来ましたよー！……………あれ

？終わってる。”

へりから拡声器ごしに女性の声が響く。

「終わってるぞお。早く助ける、儂の甥っ子と玄武を運んで行け。」
”了解しました。”

* * *

同刻、場所は日本DOAST統轄管理保安省会議室。

暗い部屋のなか何人かの人間が喋っている。

「蒼の奏者が現れました。」

「おお。それは素晴らしい。」

「では、あの計画が実行にうつされますか。」

「ええ。楽しみですよ。」

そこで、会議が終わったのだろう皆が立ち上がり部屋をあとにした。

「それで、何を企んでいるわけ？」

部屋の奥から一人の女性が出てくる。

「企んでなどいませんよ。ただ、世界のあり方を変えるだけです。」

「そう。」

そして女性は机においてある資料を手に取り眺めた。

「皆藤奏太ねえ………楽しみっ」ねえ、この子、どんな声で笑うのかしら？」

「さあ。私にはなんとも。ですが、蒼の奏者の教育係は漆黒の奏者貴女です。」

「ほんと！ああ、もつと楽しみだわ。」

そう言つて、窓の外を見る。

「こちらの管轄の病院に30分後に到着です。顔合わせをお願いしますよ。ここから、西に二キロの地点の病院ですので間違えないように。」

「ええ。」

男が立ち上がり部屋を出ていき女一人になる。

「さてと、病院に向かうかな。でも、あの爺達の好きなようにあの子を使わすわけにはいけないから。ああ、自分じゃない人を演じるって疲れるな。今度、源太郎に文句言わないと。」

そう言って部屋をあとにする。

誰もいなくなつた部屋のなかP Cのディスプレイの中で“第三次世界戦争計画”の文字が点滅していた。

ファーストアプローチ（後書き）

やあやあ！

今回もやって来た竹千代です。

ほんとはもう一方の方を先に投稿する予定だったのだけど………

…先にできちゃったんだ仕方ない！

と言うわけで最近アイドルマスターにはまった竹千代ですた。

ここまで読んでくれた方々に感謝を込めて。

感想とかくれると有難いですう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5734x/>

世界を奏でし奏者

2011年11月13日07時59分発行